

佐渡年代記に拠る薬草事情

池 田 三 郎

(相川町一丁目)

I はじめに

昭和23年(1948)に薬局を開設した私は27年佐渡鉱山の縮少という事態に遭遇した。何か有益な産業を誘致して町の発展に寄与したいということを夢寝にも忘れなかった。ある日薬業新聞で、武田薬品が丹波の福知山で鮮参を栽培している記事を読んで、早速平佐旅館を通じて見学の申し込みを許された。福知山は私が陸軍での最初の任地であり、平佐旅館は陸軍病院長が下宿していて懇意だった。長田野旧練兵場跡の農園を訪れると、案内に出て来た農園次長は私の名刺を見て「佐渡相川ですか、私の伯父が相川にいた事がある。」といって出された名刺を見ると中本とある。大正初期佐渡鉱山長として大きな業績を残された故中本英彦氏の甥であるという奇遇に驚かざるを得なかった。懇切に栽培要領を教えて戴き苗を分けて貰い、私の作業が始まった。

II 私の作業

農事知識を持たない私は、中本氏の教えに忠実に作業をすすめ、会津や長野県佐久地方へも出掛けて夢中で作業をすすめたが、多忙な業務の余暇の仕事としては余りにも過重だった。特に漢方受講のため出張すると、雑草が繁茂して鮮参の生育に悪影響が窺われた。

III 佐渡年代記との出逢い

ゴールデン佐渡の御好意により、冬期間閉館時に佐渡年代期の貸与を受け抄録し、昭和49年9月新しく出版された佐渡年代記を求め精査することが出来た。佐渡の薬草事情としては鮮参の栽培と24種の薬草名の記載が記してある。鮮参については幕府が種子を与えて栽培させたが成功していない。24種の薬草についてはまたの機会に譲ることとする。

IV 私の観察と考察

種を播きあるいは苗を植えると、次の年はほとんど芽が出るが、後は年代記の記載の様に生育する率が少ない。今も沢山種子をつける7年先位のものが数本残っているが、当初植えた苗数に比すれば真に少い。

夏の夜、布団を着て寝ると何時の間にか乗り出す様に土の中にあった根が土の上へ出ているのを見受ける。私は佐久地方が金北山より海拔が高く(地図で)、長田野ないし大江山麓(ここにも武田農園がある)は鹿伏や広間や私の畠よりはうんと高い。兵隊を引率して大江山麓を過ぎ橋立に出た時の記憶では、ここも金北山より低くはない様に思える。いくら幕府の命令でも標高を無視した植物の栽培は愚なことだったと気付いた。

経塚山の採集の時、本間建一郎先生(佐渡女子高校)に竹節人参を教えられた。その後、また方々で種子の着いたものを見受けた。根は別として鮮参に大変よく似ている。赤い種子の着いた竹参を自宅の畠の鮮参の傍に植えて置いたら次の年黒点の付いた赤い実が付く様になった。これは交配したのであろうか。

V おわりに

私は畠に残っている7年生の鮮参の種子を竹参の自生している山麓附近に播いて見たいと思っている。また竹参が症状によっては鮮参に勝る効力があると云う事を古典の中に発見し、これを実地に応用して見る機会を伺うと共に資源確保に手を打つべきだと思っている。

年代記の24種に就いては、またの機会に譲ることとし、御教示を戴いた北見秀夫、本間建一郎両先生始め會員諸先生に謝意を表します。

「人は寝て居ても木は伸びる。」との有田先生のお言葉に励まされ「杉の木—30年」よりは「鮮参—5年」の方が勝ると思ひ込んだのがこんな結論になった事がおかしくてならない。